

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：11301
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26580096
 研究課題名(和文) The raising of a half in Japan and the UK

研究課題名(英文) The raising of a half in Japan and the UK

研究代表者

Barry Kavanagh (Kavanagh, Barry)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：80404820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：イギリスと日本に住んでいる国際児の子供(親は日本人と外国人)のバイリンガル発達、環境因子、教育の方法、国際児のアイデンティティーの関係を明らかにすることを目的としているという研究であった。

アンケート、インタビューを行い科学研究に必要なデータを収集した結果、日本とイギリスに在住の国際児は単一民族国家(日本)そして多民族国家(イギリス)の社会でどのように自分のアイデンティティを捉えているかが分かった。また、どのように第二言語を勉強するかも明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study examined bicultural bilingual children born to a foreign and Japanese parent living in the UK and Japan. In a longitudinal study the research looked at these children bilingual development, parental attitudes, and educational methods employed and the ethnic identity of the children themselves. Through questionnaires, interviews and home visits and observations the following themes were examined.

1. How these children are perceived in a multicultural society such as England and a homogenous environment as reflected in Japan was compared cross culturally was examined. 2. What methods are utilised by the parents / communities in order to raise their children bilingually was also compared across these two societies. 3. Through experiments the Sapir-Whorf hypothesis of linguistic relativity was tested for its applicability to how bicultural bilingual children see the world. This was tested through shape, object and colour recognition tests.

研究分野：Bilingualism (Applied linguistics)

キーワード：SLA Child bilingualism Bicultural children Ethnic identity

1. 研究開始当初の背景

海外旅行をすること、第二言語の相互作用及び十分な量のインプットは、バイリンガリズム育成において大切な要因といわれている(Yamamoto,2001)。また、国際結婚をしたカップルにとってイギリスのような単一言語環境では子どもをバイリンガルに育てる上で困難が多いと報告されている(Kavanagh, 2013)。実際には、子どもが母国語しか話せない、第二言語を聞き取ることができるが、話せないというケースがある(山本 1996)。

本研究はイギリスと日本に住んでいる国際児の子供(親は日本人と外国人)のバイリンガル発達、環境因子、教育の方法、国際児のアイデンティティーの関係を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的

継続的研究として以下のテーマについて検討した。イギリスと日本に住んでいる国際児の子供(親は日本人と外国人)のバイリンガル発達、環境因子、教育の方法、国際児のアイデンティティーの関係を明らかにすることが研究の目的であった。また、以下の三つの点についても考察した。

認知・言語における相対性「サピア・ウォーフ仮説」はバイリンガル国際児の現実世界にどのように影響するか。

ハーフの母語と第二言語の違いによりどれほど認知機能に差がでるか。

環境が与えるハーフのバイリンガル発達、エスニック・アイデンティティーはどのような影響があったか。

アンケート、インタビューを行い科学研究に必要なデータを収集した結果、日本とイギリスに在住の国際児は単一民族国家(日本)そして多民族国家(イギリス)の社会でどのように自分のアイデンティティーを捉えているかが分かった。また、どのように第二言語を勉強するかも明らかになった。このインタビ

ューは今後の学会でのバイリンガルアイデンティティーと教育の方法の関係について発表した。このことは論文の投稿を行なっていく上でとても有意義なものとなった。

3. 研究の方法

対象者は日本及びイギリスに居住する日系国際児を持つ外国人と日本人の両親34人(20世帯)であった。子どもの年齢は5歳から13歳までである。対象者に子どものエスニックアイデンティティーに関連するアンケートを実施しその後訪問し、親子にインタビューした。それらのデータを SPSS という統計ソフトを通じて分析した。

4. 研究成果

下にある研究成果は下記に簡潔に記載する。

・日本、英国在住日系国際児のバイリンガル育成に関する要因。

国際結婚をしたカップルにとってイギリスと日本のような単一言語環境では子どもをバイリンガルに育てる上で困難が多いと言われている。実際には、母国語しか話せない、第二言語を聞き取ることができるが、話せないというケースがある(山本1996)。バイリンガル育成に影響する要因は複雑に入り組んでいるためである。

本研究はイギリス及び日本に在住の日系国際児(親が日本人とイギリス人)のバイリンガル発達、環境因子の関係を明らかにすることを目的とし、特に家庭での使用言葉、親の考え方、住んでいる環境、と第二言語に接する時間との関連について調査した。

全ての親は一生懸命子供をバイリンガルに育てようとしている。バイリンガルアプローチとしての OPOL (One Parent-One Language)方法を信用している。全ての子どもこれまでの帰国回数は2回以上であった。

全ての家庭でバイリンガルの教育方法として日本語の DVD、本などを使用するが、子供のモチベーションを維持することは難し

いと述べている。同年齢のネイティブスピーカーの子供に比べ、言語能力レベルに大きな差はあるが、家族は日本、イギリスに帰国した際子供の日本語、英語能力が急激に上達していくと感じている。

Arnberg (1987) は単一言語環境で、親が OPOL アプローチのみを使用すれば、子供が「聴解型バイリンガル(Passive bilingual)」になりやすいと述べており、Noguchi (2001) は OPOL と同時に MLAH (Minority Language at Home 家庭内で日本語しか話せない) アプローチをする事により balanced bilingual になる傾向があるという。本研究では日系国際児のバイリンガル育成に影響する要因を検討した。バイリンガル育成に影響する因子として、親の第二言語の使用頻度と日常的に第二言語を話す環境が考えられる。

日本及び英国在住日系国際児のエスニックアイデンティティーについて。

日本及び英国在住日系国際児のエスニックアイデンティティーと社会的知覚はどのように違うか、この社会的知覚はどのように国際児のエスニックアイデンティティーに影響を及ぼすかの関連について調査した。

本調査の主な結果を抜粋して示した。子供が華やかなイメージの偏見を持たれることがありますかという問いに対して、全ての親が「はい」と答えた。しかし、イギリスと日本に在住する国際児の経験はかなり違う。親子の答えの要約を表 1 に示す。

表 1 親子の答えによる国際児のイメージと期待

	イギリスに在住する国際児の認識	日本に在住する国際児の認識
第二言語について	日本語はかっこいい。バイリンガルに対する嫉妬。	英語はかっこいい。バイリンガルに対する嫉妬。国際児は英語がペラペラ。

		もちろん全ての国際児はバイリンガル。
外見について	特になし。	国際児はイケメン、可愛い。
社会的知覚について	そんなに目立たない。イギリスの社会に溶け込んでいる。イギリス人との違いを感じない。特別なエスニックカテゴリーに分類されない。イギリス人は日本と中国の文化と言語をよく間違える。	非常に目立つ。周りに人のコメントで強制的に日本人と違ったことを感じる。ハーフとして分類された。日本人と違いたくない。外人と言われると嫌だ。日本語のミスがあれば外人だからと言われる。身体的に違和感を覚える。英語に上手くなることを皆が期待する。

日本では、日本人と外国人の血が 50% ずつ混ざっている人を「ハーフ」と呼ぶ。「ハーフ」に対しての固定概念が強い方に会うと、改めて日本の単一民族社会性を感じる場合があります。」「固定概念として日本人はハーフと聞くと必ず日本語も英語も話せるバイリンガル、イケメン、美人に決まっていると言うイメージがある」などと日本人の母親は述べている。

「ハーフ」は差別用語だと思いますかという問いに対して、イギリスに在住する日本人の親は「いいえ」と答え、逆にイギリス人の親は「はい」と返事した。理由として、イギリスのような多数民族社会、混血などまったく珍しくはないが、「ハーフ」という用語は国際児と国際児の親に対する蔑称であると挙げている。

日本に在住する国際児の親はハーフが差別語ではないと答える頻度が高かった ($p < .05$)。

日本のメディアでよく使われている用語で、日本人の母親によると「日本では、ほとんどの場合プラスの意味で使う方が多いので、差別とは思いません」と述べている。

同様の質問を子どもに聞くとイギリスに在住する国際児がほとんどハーフという言葉は聞いたことがないと答えている。逆に日本に在住する国際児が「ハーフ」という表現が分かり、ほとんどの子どもは「ハーフ」が言われても気にならない、「ハーフ」より周りの人に外人と言われたら気に触ると答えている。本研究は日本及び英国在住日系国際児のエスニックアイデンティティーに関して比較検討することが目的であった。国際児のアイデンティティー形成過程は環境の違いによって育つことを明らかにした。5才から子どもは自分のエスニックアイデンティティーと社会的アイデンティティーを成す(Baker,2007)。この子どもが大人になると自分のエスニックアイデンティティーはどのように変わるかが今後の課題として残されている。

サビア・ウォーフ仮説について。

認知・言語における相対性「サビア・ウォーフ仮説」はバイリンガルハーフの現実世界にどのように影響するか。ハーフの母語と第二言語の違いによりどれほど認知機能に差が出るかを明らかにした。

<引用文献>

Arnberg, L. *Raising children bilingually: The pre-school years.*

Multilingual Matters. 1987

Baker, C. *A Parents' and Teachers' guide to bilingualism.* Philadelphia.

Multilingual Matters. 2007

Kavanagh, B. The Raising of bilingual haafu children in contemporary Japan." *electronic journal of contemporary Japanese studies* volume 13 issue 4. 2013□

Noguchi, M. Bilinguality and bilingual children in Japan: A pilot survey of factors linked to active English-Japanese bilingualism, in Noguchi, M. & Fotos, S. (eds.) *Studies in Japanese bilingualism* (pp. 234-271) 2001

Yamamoto, M. Language use in interlingual families: a Japanese-English sociolinguistic study. Clevedon, Multilingual Matters 2001

山本雅代『バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか』明石書店 1986

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

1. Barry Kavanagh

The balanced bilingual child: Is it akin to the quest for the Holy Grail?

東北大学言語・文化教育センター年報 査読無(2)25-27. 2017

2. Barry Kavanagh

Does having an older sibling support or hinder the development of bilingualism in younger siblings? : A case study of

British and Japanese families. 国際文化研究 査読有(23) 209-224.2017

3. Barry Kavanagh

日本及び英国在住日系国際児のエスニックアイデンティティについて JSLs (The Japanese Society for Language Sciences)大会 プロシーディング 査読有 18, 214-216. 2016.

4. Barry Kavanagh

英国在住日系国際児のバイリンガル育成に関する要因.[第26回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会プロシーディング 査読有 65-67. 2015.

5. Barry Kavanagh
Bilingualism among mixed race children in Japan. The 20th PAAL Conference proceedings.[The 20th PAAL Conference proceedings, 査読有. 120-121. 2015
6. Barry Kavanagh
ハーフの子供のバイリンガル育成に影響する要因.[青森県保健医療福祉研究発表会, 査読有(2014)20-22.

[学会発表](計8件)

1. Barry Kavanagh
A contrastive analysis of bicultural children's identity and bilingual development within the UK and Japan. 1st International conference on sociolinguistics. Insights from Superdiversity, Complexity and Multimodality. September 1st-3rd 2016, Eötvös Loránd University. Budapest (Hungary).
2. Barry Kavanagh
A Cross-Linguistic Study Of Object Classification and Perception within Bicultural Bilingual Children Living in the UK and Japan. The 7th International Conference on Intercultural Pragmatics and Communication□INPRA.10-12th June 2016. University of Split. Split (Croatia).
3. Barry Kavanagh
日本及び英国在住日系国際児のエスニックアイデンティティについて
JSLs2016: The Japanese Society for Language Sciences 18th Annual International Conference. 4-5th June. Tokyo University.
4. Barry Kavanagh
Sociolinguistic factors that influence the bringing up of biracial bilingual child in England and Japan. Bristol

Postgraduate Conference on Language and Society Clifton Hill House, 4th March 2016. University of Bristol. Bristol (England).

5. Barry Kavanagh
英国在住日系国際児のバイリンガル育成に関する要因. 第26回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会 2015年12月19日—20日. 東北大学(川内キャンパス)
6. Barry Kavanagh
Bilingualism among mixed race children in Japan. The 20th PAAL Conference. December 5th-6th 2015. Korea University, Seoul (South Korea).
7. Barry Kavanagh
Environmental factors effecting the bringing up of a bilingual child: A study of the bilingual *haafu* in rural Japan. The 21st International Conference of the IAICS cum The 11th Biennial International conference of the IAICS. July 15th-18th 2015. The Hong Kong Polytechnic University.(Hong Kong).
8. Barry Kavanagh
ハーフの子供のバイリンガル育成に影響する要因 2012年度青森県保健医療福祉研究発表会 December 20th 2014.

6. 研究組織

(1)研究代表者

バリーカヴァナ (Barry Kavanagh)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：80404820